第２４回防衛問題セミナー記事録
（平成２６年１０月２日　静岡新聞ホール）

【司会】
定刻となりました。ただ今から、防衛省南関東防衛局主催の「第２４回防衛問題セミナー」を開催いたします。まずは、主催者であります南関東防衛局長・丸井博より開会の挨拶を申し上げます。

【局長】
皆様こんばんは。
防衛省南関東防衛局長の丸井でございます。本日は御多用中のところ、「防衛問題セミナー」に多数の御参加をいただき、ありがとうございます。
この「防衛問題セミナー」は、国の防衛政策や防衛省・自衛隊の活動について広く国民の御理解をいただくための広報活動として開催しておりまして、ここ浜松市では、今回で４回目の開催となります。
今年、防衛省・自衛隊は、昭和２９年（１９５４年）に発足してから６０年、航空自衛隊発祥の地として歴史を持つ浜松基地も開庁６０年を迎えました。
この６０年間で、防衛省・自衛隊を取り巻く国内外の環境は大きく変わり、一層厳しいものになっている中、自衛隊の活動を全うするためには、国民の皆様の理解と協力を得ることが、ますます重要となってきております。
さて、本日の防衛問題セミナーでは、「日本の安全保障」をテーマに、はじめに航空自衛隊　第１航空団副司令である池田　五十二　１等空佐から、「強い戦士を作るために～航空自衛隊の教育現場における奮闘～」と題しまして、御講演いただくことにしております。
池田副司令に続きまして、静岡県立大学教授であり、現代韓国朝鮮研究センター所長である、伊豆見　元　先生から「最近の北朝鮮情勢と日本」と題して、御講演いただきます。
伊豆見　元　先生は、皆様ご存じのとおり、北東アジアの安全保障や朝鮮半島の政治・外交の専門家であり、多数のメディアにも御出演されております。　最近の北朝鮮情勢について、大変貴重なお話をお聞かせいただけるものと思っております。
本日、多くの皆さまに御参加いただけましたことは、今回のテーマに対するご関心が大変高いことを裏付けるものであると感じております。
最後となりましたが、本日の防衛問題セミナーは、浜松市から後援を賜りますとともに、本日お見えの鈴木浜松市長始め、多くの関係者の御支援・御協力により開催する運びとなりました。　ここに、関係各位の御支援・御協力に感謝を申し上げます。

本日のセミナーにより、皆様方の防衛問題に対する御理解が深まることを祈念し、主催者挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

【司会】

続きまして、御来賓の浜松市長・鈴木康友様より御挨拶を頂戴いたします。

市長、よろしくお願いいたします。

【来賓挨拶　浜松市長】

皆様こんにちは。本日は第２４回となります防衛問題セミナーが、この様に盛大に開催されますことを心からお喜びを申し上げます。

また、こうして浜松で御開催をいただきまして厚く御礼を申し上げます。

先ほどの局長のお話の中でも、あるいは冒頭のビデオでも、国の防衛・安全保障、あるいは自衛隊を取り巻く環境というのは大きく変化をしておりまして、最近は近隣諸国との領土を巡る緊張でありますとか、あるいは集団安全保障の中で、自衛隊にも随分と海外貢献活動での要請が頻繁に行われるなど、かつては想定出来なかったようなことも起こってきております。

実は、私は市長になる前の国会議員時代にこうした問題に関わって参りまして、例えばイラク、当時はイラク戦争真っ直中でございましたので、イラク特別委員会で自衛隊の派遣問題等に取り組んだり、ちょうど今の尖閣問題の発端となります日中中間線の東シナ海の海洋権益の問題等、超党派の議員でこうした問題に取り組んだり、あるいは北朝鮮の話もありますけれども、安部首相等、これも超党派の議連で拉致問題に取り組んだりと、こうした取り組みをして参りました。

特にイラク問題の時は、ちょうど自衛隊がサマワに派遣されることになり、第一次の復興支援群長ということで、責任者として派遣されたのが番匠幸一郎君という私の大親友でございます。彼が自衛隊の陸自のいわゆるまさにエースとしてイラクに派遣されるということで、派遣前に色々語り合ったこともいい思い出でございますけれども、ちなみにその時の復興支援隊長がヒゲの隊長佐藤元久さんでございます。

また、先ほどお話ししました東シナ海への海洋権益への問題では、大変ゆゆしき問題でございましたので、これも超党派の議員で研究会を作りまして、海上保安庁に飛行機を出して頂きまして、飛行機の上から尖閣を調査し、そしてガス田を超低空で視察を致しました。そこで作業をする中国人がはっきりと認識できる所まで海上保安庁の飛行機におりて頂き、調査をして戻ってきて色々と皆で話し合って作ったのが、いわゆる海洋権益を守る「海洋基本法」という法律で、そういう成果として現れたわけでございます。

市長になりましてから、こうした安全保障と防衛の問題と正面から向き合うというこ

とはなくなりましたけれども、浜松市も基地を抱えるわけでございまして、そうした市長として、また国民として、こうした安全保障の問題、あるいは防衛の問題に無関係ではいられないわけですので、市長の立場として今、そうした問題に関わっているところでございます。

今日は池田１等空佐から、タイトルがすごいですね、「強い戦士を作るために」ということで、おそらく、今、現場で自衛官の皆様を教育するのは色々なご苦労があると思いますので、そうしたお話でありますとか、北朝鮮問題の第一人者であります伊豆見先生にお越しを頂いておりますので、まさに時宜を得たというかですね、瀋陽における日朝会議が今ちょっと暗礁に乗り上げていたり、金正恩第一書記が病気であるという報道がされておりますので、今日は、北朝鮮の現状がどうであるかという貴重なお話が聞けるのではないかなと思います。

今日のこの防衛セミナーが、皆様にとって有意義なセミナーになりますことを心からご祈念申し上げますと共に、この度このセミナーをご開催頂きました防衛省南関東防衛局の皆様に、心から感謝申し上げまして御挨拶に代えさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

【司会】

どうもありがとうございました。

それでは、本日の防衛問題セミナーの講演に入ります。まずは、航空自衛隊第１航空団副司令　池田　五十二（いけだいそじ）１等空佐による講演です。池田副司令、ご登壇お願いいたします。皆様、拍手でお迎えください。

池田副司令についてご紹介致します。池田副司令は、昭和６１年３月に防衛大学校を卒業後、航空自衛隊に入隊されました。これまでに、第６航空団飛行群　３０６飛行隊、航空救難団飛行群　小松救難隊長、航空幕僚監部　運用・情報部　運用支援課、航空救難団飛行群　新潟救難隊長、航空支援集団司令部　防衛部運用第２課長、第１１飛行教育団　飛行教育群司令などを歴任され、本年１月から現職に着任されております。

本日は、「強い戦士を作るために～航空自衛隊の教育現場における奮闘～」と題しましてお話をしていただきます。それでは、池田副司令、宜しくお願いします。

【池田副司令】

こんばんは。第１航空団副司令の池田でございます。よろしくお願いします。本日はお足元の悪い中、これだけの方に集まって頂きありがとうございました。伊豆見先生の人気のお陰と思っております。ありがとうございます。

私の所属しております第１航空団は、航空自衛隊のパイロットを養成する部隊であり

ます。私は、こちらにウィングマークといってパイロットの証のマークをつけておりますが、第１航空団を卒業しますとこのウィングマークを取得できるところであります。今、パイロット学生はこれをとるために頑張っているところであります。本日は、強い戦士を作るためにということで、いかめしい題名を付けさせて頂きましたが、今「ゆとり世代」でありますとか、「今の若者は大丈夫か」といったような話がある中で、「頑張らない教育」を受けてきた人をいかに頑張らせるか、自衛官が頑張らないと誰も頑張らないわけですから、いかにやっているかというところを皆様に御紹介したいと思います。宜しくお願いいたします。

まずは、「浜松基地に寄せられる苦情・申し入れ」といったことから始めたいと思います。浜松基地には先ほど４機の写真がありました、Ｔ－４練習機やＡＷＡＣＳ（Ｅ－７６７）、これは大型機です、それとＵ－１２５という救難のジェット機があります。ですから、日夜訓練をやっていてもジェット機の音ですから、やはり大きい音が鳴りますので、時々こういった苦情が舞い込んでまいります。ヘリコプターもひとところにずっといるとうるさいわけでして、夜通し働いてきて朝方に帰ってきた人にとって「バタバタ」とやっていると、「うるさい」という方もいるわけです。こういった苦情があります。「なぜ同じところで、空中に止まっているんだ、うるさい」、「大型機が飛ぶとうるさい」、「こんな夜中になぜ飛ぶんだ、うるさい」というものがあります。うるさいのは確かですので、私どもの担当は「御迷惑をかけて申し訳ありません。ただ、ミッション、実際の任務あるいは訓練に必要なフライトでありますので、どうか御理解下さい」という説明になるわけでありますが、そういった説明、広報活動を地道にやっていかなければいけないと思っておりまして、実はこの防衛セミナーも広報の一環ということで、この後から説明していきます内容によって、この疑問が晴れることを願っております。

まずは、「東日本大震災における使命感」ということで、自衛官のこの時の使命感をご説明したいと思います。２０１１年3月１１日１４時４６分ですが、三陸沖を震源地としますマグニチュード９．０、最大震度７の地震が起き、また、津波の被害が非常に大きな大惨事になったことは、皆さん記憶に新しいかと思います。そこでの死亡者については、カウントできただけでも１５，８６１名、まだ行方不明者は3千弱の方がおられるということであります。死亡者の９０％が水死だったというのも、この災害の特徴であったと思います。自衛隊は発災当初から出動しまして、延べ１１万人の隊員で対処をしました。

これが東日本大震災における自衛隊の活動です。まず画面左側でありますが、陸海空の装備あるいは人員をいかんなく全部使うために、統合任務部隊という臨時の統合の部隊を作っています。従いまして、この３つ合わせて下にありますのが、延べですが１１万人、あるいは航空機５４０機、艦艇５０隻というものを使って、震災に対処したわけ

です。画面右側が実績ですが、３月１１日から３月３１日までの２０日間、わずか２０日間の実績がこれであります。人命救助におきましては、２万人弱の方を安全な場所に移したり、ある日は避難所まで送り届けたりというところで救助しています。また遺体収容も６，６００体ということで、陸地から、あるいは水中に潜ってということで、ご遺体を収容して手厚く葬っているご遺体も何体かございます。また給水、あるいは給食についても、かなりの数を運び、給仕をしておりまして、その中でも一番喜ばれましたのは、入浴支援であります。日本人はきれい好きといいますか、何日か風呂に入っていないという状況を入浴支援しますと、１１万人位だったのですが、一時的ですが皆さん、にこやかな顔になったということで、隊員の励みにもなったというところです。

これが実際の画像です。画面左上は宮城県の松島基地、航空自衛隊の基地ですが、そこが津波の被害を受けまして、これはＦ－２戦闘機ですが、２８機が流され全て使えなくなったという状況で、これも津波に流されてこの庁舎に突っ込んだという、非常にショッキングな写真です。

また、人命救助ということで、最初雪の降っている中、まだ息のある人はいないだろうか、つぶされていて助けを求めている人はいないだろうか、ということで探し回っております。実際にご遺体をかなりの数を葬っておりますが、今の社会事情から、今の若い人はおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしていないということもあり、生のご遺体を見たことがない若者ばかりで、そういう人たちがご遺体探しをやって、ご遺族のために１分１秒でも早く届けたいという使命感を持ってやる姿は非常に涙ぐましいものでありました。

救難部隊につきましても、発災当初から救助活動を実施しまして、最初の４日間で２，３００名の方を安全なところに救出したという実績があります。実は航空救難団というこの救難の部隊は５１年目でありまして、創立５０年の時に式典があったのですが、５０年間の災害派遣の救助した人数が１，８００人、それを４日間で越えるような数を救出したというところです。また、これも非常に奇跡だと思いますが、流された屋根の上に残っていたおじいさんを、海上自衛隊の船を使いまして救出したというところです。これは米軍のいわゆるトモダチ作戦です。米軍が来まして、駅のがれき等をすべて片付けてもらいました。

物資もホバークラフト、海上自衛隊の船等を使いまして、かなりの数を運んでおります。避難所等で配ったりするのですが、入れる方はいいのですが、出す方が非常に苦労したというふうに聞いています。トイレもなかなか運べないものですから、簡易トイレを作ったり、あるいは穴を掘ったりというところで工夫しました。

また、入浴支援でありまして、船のお風呂を利用して支援をしたところです。非常ににこやかなのですが、この方たちもご遺族でありご家族を亡くされたりだとか、家を流されたりという方、そういった方たちが一瞬でも笑顔になったというところが、我々が

ほっとする一瞬だった思います。

福島原発の状況です。この３号機が水素爆発しまして、建屋がむき出しになっている状況になりました。この中で当時、菅首相の取ろうとした方策は、ＣＨ－４７、これでいつも山林火災などを消火するのですが、消火するための消火バケット、大きいバケツですが、それで水を汲みまして、上空で撒きなさいということでした。そして、放射能塵という塵に放射線がついているのが浮遊しているので、水でこれをまず落とす。それで、落としたところで自由に上をヘリコプターが飛んで、次は、遮蔽するような薬、ナトリウムなどを撒いて、遮蔽効果の高い膜を張るといった作戦をしなさいということでありました。何回かテレビには出ているかとは思いますが、そういった放水作戦をやりました。やはりむき出しになっていますので、放射線は飛びまくっています。まさに上にいる人はいわゆる被爆をしたものでありますが、いかに最小限にするかということで、機内はこういった状況になります。放射線防護衣を着て全部密閉した長袖・長ズボンを着て、ここに鉛の鉄板を入れたものを、だいたい１５kg～２０kg位ですが、これを着まして、防護マスクをしました。これでも被爆はするんです。除けられないのです。ただ、放射能のついた塵を吸い込まないため、体に付着させないための処置だけでございますので、ヘリコプターの下にはタングステン、放射線の遮蔽効果はありますのでこれを敷きまして、そういった状態で上空で水を撒いていたというところです。

また、後半は同時平行で消防車が建屋のここまで近づいて、放水をしたというところでありまして、やはり消防車の前面にはタングステンを敷きまして、被爆をしない処置をした上で放水をしています。やはり、ヘリの隊員、消防車の隊員も被爆をしていますが、だいたい１．０ミリシーベルト以下の被曝量で済んだというのは幸いです。この１．０ミリシーベルトがどんなものかということは次のこの表でございまして、日本における年間の自然放射線、太陽からの放射線とか、自然に浴びてしまう量というのが、１年間で２．１ミリシーベルト。これの半分を浴びてしまったということです。ただ、これは積算ですので、この後に放射線を浴びないような処置をすれば、そんなに高い値ではないというところでありましたので、一安心したというところですが、それに至るまでの自衛官の決心、覚悟というものは大変なものだったと思っています。

今、御嶽山で自衛隊が活動していると思いますが、御嶽山もまた再噴火するかもしれないという中で、また、あるいは現場で、二酸化硫黄であるとか硝酸とか、そういった有害な空気が漂っているかもしれないという中で、自衛官が行ったということは、まさに覚悟であったり、ご遺体を早くご遺族の元に届けたいという心待ちだと思います。

続きまして、「対領空侵犯措置における使命感」ということであります。この図は緊急発進といいまして、日本の領空の近くにどこの国だか分からない、識別が分からない飛行機があった時に、自衛隊の戦闘機が監視に行きます。それをスクランブル、緊急発進と言っています。それと同時に、ＡＷＡＣＳという空飛ぶレーダーも飛ぶことがあり

ます。この空飛ぶレーダーは、地球は丸いので地面からのレーダーだとその近くまでしか見られないので、上空へ行って遠くまで見よう、遠くで発見して早く対処しようというのが意図であります。この日本の領土のすぐ横にあるのが領海の線でありまして、領土と領海の線のすぐ上が領空です。他国の領空内はその国に断りなしに入ってはいけないのです。入ったことで、それは敵対行為と見なされるわけであります。ですから、他国のこういった民間航空などは縦横無尽に行っていると思うのですが、そういう飛行機は、必ずフライトプランという計画を出しまして、何時何分、ここの位置からここの位置までどれくらいの高度で行くと、何ノットで行くという計画をきちんと出さないとダメなのです。そのプランを出してないような飛行機が来たときはスクランブルで上がるわけです。本当に出していないのか、出したけれどもその情報がこちらに届いていないのか、というようないろいろの不具合もあるのですが、すべからく全部上がります。全国に何か所か戦闘機の基地があるのですが、例えばこの赤いのはロシア機が通った航跡ですが、時には日本を一周する時もあります。あるいはこういうふうに出てきて、すぐに帰ってしまうという時もあります。色々なパターンに合わせて、色々な基地からスクランブルをかけるというのが現状でありまして、この黄色いのは中国機です。この中国機に対しても、沖縄からあるいは九州から戦闘機が出ているわけです。

ここにおきましても、そういうふうに上空に上がるパイロットにつきましては、空飛ぶ警察官、あるいは空飛ぶ外交官というふうにも言われます。外国の飛行機に対して、対処を間違えれば国家間の重大な問題になりかねないということで、パイロットについては、沈着冷静な判断といざというときに識別の分からない飛行機が何かやったらしっかり対処するぞという意気込み等も必要になってくると思います。

これは先ほどのスクランブルについて、冷戦以降の発進回数ですが、最も多かったのは、昭和５９年の９４４回で、それ以降はソ連が崩壊致しまして、回数が下がりました。それがまたぶり返して来まして、平成２５年でありますが８１０回になっています。ただその内容が変わっておりまして、中国機が年々激増してきて、中国機に対するスクランブルが増えてきているというのがこの図です。

これは、スクランブルで上がった自衛隊機の方から、中国機を撮った写真ですが、最近話題になりました防空識別圏、ＡＤＩＺであります。領空からしますと、もうちょっと広げた形のエリアになっていると思うのですが、エリアが縦長で細いため、本当に領空に入りそうになった時に上がっても間に合わないわけです。ですから、もうちょっと遠くで識別するための余裕が欲しいということで、「ここに来たら飛行機を上げる」と各国が勝手に決められるのです。隣の国とは、協議をします。

それで、先般、中国が突然、「防空識別圏はここだ」と示しましたが、何の調整もありません。しかも日本の領土が入っています。こんなことはあり得ません。そういった中で運用をやっていくということで、ここは非常に懸念されるエリアだということで

す。

　また、中国において、自衛隊機が中国機に急激に近づいてきて危ないことをしていったという報道もあったやに聞いていますが、先ほど言いましたとおり、日本の航空自衛官は空飛ぶ警察官、あるいは外交官ということで、そんな危ないことをする理由がありません。意義がないということで、全くの誤報ということです。

　ここで先ほどの苦情の話しですが、少しは御理解頂けるようになったでしょうか。大型機がうるさいですが、あれが非常に重宝するのです。夜中なぜ飛ぶかということですが、夜中に相手が来るからです。その点について御理解頂きたくよろしくお願いします。

　そこで、これまでいろいろな自衛官の使命感というのをお示しさせて頂きましたが、この「パイロットの教育現場の奮闘」ということで、その使命感をいかに作るかということを説明したいと思います。皆様ご想像のとおり、強い戦士を作っていくわけですが、強い戦士というのは、やはり旺盛な体力、そして高度な技術が必要ですが、その根底にあるのは強靭な精神力です。やはり国を守るという強い意志、あるいは見えないものに立ち向かっていく勇気、放射線がそうですが、そういった勇気、強靭な精神力といったものが必要になってくるということです。

　翻って現代の若者気質はどうであろうかと考えたいと思います。今、１空団のパイロットもゆとり世代がちょうどさしかかっているところです。そんなゆとり世代も含めた現代の若者気質ですが、まず、生まれてこの方、我慢してないのではないかという状況が考えられます。生まれついてから冷暖房完備、兄弟がいないので、何かを取り合うこともない、親は何でも聞いてくれる、先生は怒らない、我慢するところがないのです。ですからいくら辛抱しろと言っても、辛抱という辞書がないかもしれません。

　また、携帯やコンピューターしかりですが、オート化しています。この先、「どこそこ行きたい」と言ったら勝手に行ってくれるという時代が来るのではないかと、そういう意味でオート化としていまして、よく考えない風習がついてしまったのではないかと思っています。

　自分の残存エネルギーと相談しながらやりますので、ＭＡＸ８割、９割頑張らない、６割、７割くらいで「自分がやりたいのはこれではないか」と思ってしまう。いつの間にか、頑張らない体質になっているのではないかと思える節があります。私も昔、パイロットになりたいと思いましたけれど、本当になれるとは思いませんでしたが、パイロットになりたい、弁護士になりたい、医者になりたい、本当に思ってきたと思うのですが、今はそこそこを目指すのです。だから何になりたいではなく、今の自分のレベルで何になれそうか、安易に何になれそうかというふうに考えているのではないかなと思う節があります。これは決定的に言えないのは、彼らに聞いたわけではないので、全て教官目線からです。過度の携帯依存があります。いろいろな情報が入ってきます。色々な情報が取れます。本当に便利で私も使っています。本当に便利ですが、少し語弊がある

かもしれませんが、情報過多になっていることと、深く考えないということがあるかと思います。　私は２０数年前、この１空団を卒業したんですが、その時は勉強が忙しくあまり外出出来なかったものです。勉強しないでのフライトですと、「お前はフライト禁止」なんて言われてしまうものですから、一生懸命勉強して、それでも空いた時間で外出しました。外出は本当に憩いでした。ですから、本当に勉強できないで「お前は今度の土日は外出禁止だ」と言われると、非常に困ったのですが、今の人は外出禁止って言ってもあまり効き目ない。外出禁止でも部屋にいても、携帯がありますから。ですから、今効くのは携帯を取り上げる。携帯を取り上げると「それだけは勘弁して下さい。勉強しますから」という変な時代になってきました。

あまり怒られてないという弊害なのでしょうか、善悪の価値観がちょっと多様化しているということで、全て自分本位、他人の目線がないというのが特徴的です。ですから、言われるのが「三無し」。無気力・無感動・無関心です。そしてプラス恥知らず。恥も無いとしたら「四無し」かもしれませんと言われています。先程も情報過多というのがありましたが、その原因は、やはり目標・目的が定まらない、自分の気持ちの中にしっかりと、眼前と根付いていないのではないかという気がします。ですから、行く末に関しましても、これをしっかりと根付かせるというのが鍵になってこようかと思っています。

そこで、いろいろ調べてみました。やる気について研究した方がいるのです。アメリカのアトキンソンという心理学者の方ですが、「やる気、イコール、期待×価値」。期待というのは、自分ができるかもしれないという期待値ということ、これだったらできるかもしれないという期待、価値というのは、それを成し遂げた後の価値です。自分本位な価値も社会的な価値もあるかもしれませんが、そういう価値。これはかけ算というのがミソです。どちらかがゼロになると、ゼロになってしまうということでありまして、例えば、算数の簡単な問題をずっと解かせると、これは簡単だと解くわけです。それで、この期待値、「大丈夫、出来る」と言ってやる気が上がるわけです。ずっとやらせておくと、俺は何のためにこれをやっているのだと考える。そうすると価値が無くなってくるのです。それで、これがゼロに至った時にやる気がゼロになるという仕組みでございまして、この公式に当てはめて、我々の方策を考えてみたいと思います。

やる気をいかに持たせるかということですが、本気の教官への共感ということで、やはり教官自身はパイロット学生の鑑です。部隊にいて実戦経験を積んできている、あるいは修羅場を乗り越えてきている、そのパイロットが目の前にいるわけです。その目の前のパイロットがどういうふうに考えるか、どういう心持ちで何をするか非常に興味があって、さらに教官もスーパーマンではないですから、昔は大きな間違えもやりましたがこういうふうに克服したとなった時に、自分も出来るのではないかと思うのです。

それで教官自身も、パイロットとして仕事をしていることに意気揚々とやっている、

非常に奥さんとも楽しくやっているということにこの価値をみい出す。「やはりパイロットは楽しい、自衛官は楽しい」といったところに共感が必要になってきます。

そして健全な目的付与ということで、国防については健全なのは間違いないのですが、何かの役に立つ、人の役に立つというような心理状況になってもらうことでありまして、どこの組織でもあると思うのですが、上司の私利私欲で使い回すと一気にやる気は下がるというところがあります。肩揉め、たばこ買ってこいなど、それをやることによって、自分がもてはやされるという価値を見いだす人はそれは一生懸命やるのですが、やはりそういったものはダメということで言っています。

また、段階的に目標を作ってやれば、あるレベルのこの段階までやれば、「もう少し頑張ってやってみよう」ということで、出来るという期待を継続させながら意識づけをしていくということがあります。やる気の継続に繋がっていきます。

次に、守破離とは聞き慣れていない言葉だと思うのですが、これは一つ一つ別なのです。

守というのは、まずは教官、お師匠さんのきっちりと真似をする。教育の基本は真似ですから。厳しい規律をもって守らせる、基本を教える、しっかり教えるということです。

破は、基本は分かったので、その学生に合ったやり方をさせてみる。やはりパイロットでも手の長い人、短い人、太い人、細い人がいますから、一辺倒にこうやれと言っても個人的な癖や物理的なものによりやり方が違ってくる場合があります。そういうことで、自分なりのやり方を自分の頭で考えてやらせるというのがこの破になります。

そして、教官の教えた基本的なもの、あるいは自分に合ったもの、両方を知っているわけですから、あらゆる状況に耐えられる状態になっていくということが離です。教官を離れていくということなのでしょう。そういったことで、自分の頭で考えて自立心を付けてやるということが必要です。

そして最後でありますが、同期生間の切磋琢磨ということで、人一人では易きに流れますので、一人のコースは作らないです。最初は５人入ってきましたが、周りが辞めていき一人になったとしたら、継続しません。次のコースに一緒に入れます。一人では弱いので、出来る人も出来なくなっていきますので、複数で頑張らせる。その複数で励まし合ったり、あるいは「あいつが出来るんだから、俺も出来る」という期待感なのです。「皆で卒業することに価値がある」ということで価値が上がっていくといった団体での心理というものを使いながら、やる気を出させております。

そこでやる気が出たところで、使命感を醸成するわけですが、使命感とは何だというところですが、使命感とは責任感を高次に発展させたものです。商売で言いますと、あるノルマを持って商売をやらせて、いくらの物をいくら分売った、そのノルマをどんどん果たしていくうちに、「どうやったらもっと売れるんだろうか。買う人の心理、ニー

ズは何なのだろうか」と考え、そのうちに、お客さんが喜ぶ笑顔を見るのが自分の喜びだと変わっていくのだと思うのです。それがこの責任感が使命感に変わっていく課程に似ているのではないかと思います。

使命感の育て方であります。まずは、本質を見極めさせるということで、われわれ組織の存在意義や社会の本質、これをしっかり見極めさせ、自分は何をすべきか、という使命を自覚させるということです。ここはしっかりきっちりやらなくてはいけないところです。米作りと一緒かもしれません。米はなぜあのように書くのか知っていますか。米という字は八十八と書く。八十八の行程がある。それだけ多くの行程を経て、美味しい米が出来ていくわけです。一つ一つが外せないということでありまして、新潟に行った時に習ったのですが、それと一緒で、ここはじっくりやっていかなくてはいけないところです。

教官の背中で教えるということで、先程から言っていますが、やはり学生は教官の背中を見ます。教官がどういうふうに判断をするか、どのような行動をするか、どのような顔をしているか、そういうのを見ます。教官達も昔は学生だったわけで、先人からの色々なノウハウ、あるいは魂を自分の中でもう一回燃やして、さらにアップさせて後輩に教える。この魂の伝承が必要です。

真面目さ、直向きさの重視ということで、日本が全世界に誇れる民族的な特性というのは、この真面目さ、直向きさではないかと思っています。皆さんも甲子園球児の戦いですとか、箱根駅伝が好きなのではないでしょうか。それは、あの中に流れている真面目さ、直向きさというのがあるから、それに共感するということだと思います。この真面目さ、直向きさというのは、やはり団結心であったり、勇気というものの元になります。ですから、それをしっかり重視して、教官は教えていくということです。しかしそれを外れる者もいます。今は本当に横道といいますか、真っ当なところへ行かないで抜け道というものを潜ろうとする人もいます。それも正しい場合もありますが、やはり真面目さ、直向きさというのを重視して教えるということが大切です。それを外れた時にはしっかり叱る。そうでないと善悪が分かりませんので、そういったしっかり叱るということも含めながらやっていく必要があります。

４つ目はちょっと青臭いことなのかもしれませんが、愛情の伝達です。やはり国に対する愛情、愛国心、あるいは上司、部下に対する愛とか、そういった愛で育むということが一番大切です。やはり我々も実力組織でありますので、愛情から生まれない使命感はいけないというふうに思っています。

そこで私の大事な大好きな物語で、小学校の低学年の道徳の時に使う資料で、いつも自戒も込めて覚えているのですが、「お母さんの請求書」という物語です。小学校３年生のたかし君がおります。朝食の時にお母さんにそっと１枚の紙を渡す。紙に何が書いているかというとお母さんに対する請求書です。お使い代１００円、お掃除代２００円、

ちょっとアップしています。隅々までお掃除したのでしょう。お留守番代２００円、ちょっと寂しい思いをしたのかもしれません。計５００円。５００円は3年生にしてみればちょっと高額です。たかし君はこれを恐る恐る請求したのです。たかし君は、お母さんのことをじっと見ています。お母さんは、黙ってそれを読んでポケットに入れる。次の日、朝食のテーブルに５００円玉が置いてあった。たかし君は驚きました。たかし君はとても喜んで、自分の請求が通ったということです。その隣に紙が置いてありました。「たかし君への請求書」です。「親切にしてあげた代０円」、「毎日のお食事代０円」、「洋服やおもちゃ代０円」、「風邪の看病してあげた代０円」、「計０円」。もうちょっとうるってきている方、おられるのではないでしょうか。それを読んだたかし君は泣きながら、お母さんのところへ行って、「お母さんごめんなさい、僕これから何でもするから言ってね。」と抱きしめるのです。これは非常にお母さんの深い愛情というものを感じる物語だと思うのですが、それだけではないのです。このお母さんの深い愛に、たかし君は自分の使命を自覚するのです。家の中で、お母さんを助けるには何をしたらいいのでしょうかという話です。そういったことで、自分は権利ばっかり主張していないか、私は自戒も込めて、この物語をいつも思い出しています。

まとめでございます。やはり、守・破・離ということで、しっかりと真似をさせて基本というのを徹底的に教える。そして、自分で考えさせて自分に合った運用方法をしっかり自分で確立させていく、そして色々な状況に合うような状態にさせる。この守・破・離というシステムが大切であります。

それとやはり、先人が強くないと強い戦士は出来ない。先輩戦士が自分の魂を磨くこと、自分を磨くことなのです。そういった高い精神と技能をしっかり伝承していくということが必要です。

最後は愛情を持って見守るということです。なかなか、この見守るということが出来ないのだと思います。どうしても手を出してしまう。出してはダメなのです。自分で考えさせないとダメです。子どもが小さい頃、1歳くらいの時、調味料がたくさん並んでいるのを見て、色々なものに興味があるので取りたがります。それで、お酢や醤油を舐めようとするのですが、妻は悉く取り上げていました。「これダメだ。美味しくない。」と。そうすると、子どもは興味があるからずっとやるのです。舐めさせればいいのです。お酢を舐めると美味しくないので泣きます。その時は泣きますが、もう二度とやりません。そういった見守るということがなかなか親にとっても、本当に苦しく大変なことでもあるのですが、それで自分の自活力、自立心を育てることが必要なのだと思います。

私は居合いをやっておりまして、「剣は心なり。心正しからざれば剣もまた正しからず」といった言葉が昔からあります。

これは島田虎之助さんという幕末の剣豪で、勝海舟の剣術の先生と聞いております。やはり武器を持つ者は、心、精神を正しくあらんということで鍛えなくてはいけないと

いう意味でありまして、やはり自衛官にも十分通用します。自衛官は、心正しくあらねばならないということで、これからもやっていきたいと思っています。

　ご静聴ありがとうございました。

（伊豆見講師の議事録については、追って掲載します。）